文教温故

乾

ホ 2
5692
1

門 本2
號 5692
卷 1

文教溫故

文教溫故自序

夫非攷古則不能泝源非博洽則不能知古未有一味作美膳片音調妙曲者也故道備文武學兼和漢洞通古今商確彼此而後可與言學矣蓋文教之要切在於此濟世利物固其所也然時有盛衰世有否泰泰則顯諸事業否則形諸文字古之學者亦皆如此不然則雖竭三餘之晷窮四部之籍而沒世無所用也謹按古史

應神之朝百濟來貢始傳經典自是以來聖化

陳仲民之藏書

早稲田大学図書

文教温故

文教温故自序

夫非攷古則不能泝源非博洽則不能知古未有一味作美膳片音調妙曲者也故道備文武學兼和漢洞通古今商確彼此而後可與言學矣葢文教之要切在於此濟世利物固其所也然時有盛衰世有否泰泰則顯諸事業否則形諸文字古之學者亦皆如此不然則雖竭三餘之晷窮四部之籍而沒世無所用也謹按古史應神之朝百濟來貢始傳經典自是以來聖化

勝伯氏四義書

早稲田大学図書

文教温故

W 57227

盛闡儒風大振文教郁郁英才蔚起其後通信隋唐朝廷制度一遵唐禮於是彼文學終自爲吾文學矣故曰非效古則不能泝源非博洽則不能知古此之謂也是以擇其所當知者彙而録之名曰文教温故以便童蒙今也舉其一隅而已雖然讀者詳焉則八珍之美八音之妙庶乎窺其崖略矣文政十一年歲次戊子春正月山崎美成識

文教温故目次

第一文學

學規　大小經　四道儒　律令格式

武備　爛脫　折桂　燈油料

程朱學　新舊二義

第二學校

釋奠　文宣王

第三經籍

始傳經典　五經　十三經　老莊爲經

四書　孝經　讀書始用孝經或千字文

孟子非經　佚書存吾邦　書冊
第四訓點
點圖　遠古止點　法家點圖
御書始調進點圖角筆　訓點　朱墨兩點
返點　須豆假名　濁點　朱引
第五讀法
經傳古訓　名目　漢音吳音　對馬音
第六文字
上古無文字　新字　和字　省字
偏旁之稱　假名　片假名　伊呂波

伊呂波終書京字　以難波津淺香山二歌爲
書學始　假名書之用意　蘆手歌繪
第七文章
平出闕字　闕畫　年號　和文
假名遣　書翰
第八詩賦
詩賦起原　詩話　詩會　聯句
掩韻
第九和歌
和歌　抄物　制詞　連歌

和漢聯句　儒書
第十印板　始刻醫書
古刻多佛經
活字版

目次終

文教温故卷之上

江戸　山崎美成著

文學

學令曰凡學生在學各以長幼爲序初入學皆行束脩之禮於其師各布一端皆有酒食其分束脩三分入博士二分入助教凡經周易尚書周禮儀禮禮記毛詩春秋左氏傳各爲一經孝經論語學者兼習之凡教授正業周易鄭玄王弼註尚書孔安國鄭玄註三禮毛詩鄭玄註左傳服虔杜預註孝經孔安國鄭玄註論語鄭玄何晏註義解云謂非是一人兼習二

家或鄭或王習其一註若有兼通者既是爲博達也
これより後延暦十七年三月十六日官符曰應以春
秋公羊穀梁二傳各爲一經教授學生事右得式部
省解偁按學令云教授正業左傳服虔杜預註者上
件二傳弃而不取是以古來學者未習其業而以去
寶龜七年遣唐使明經請益直講博士正六位上伊
與部連家守讀習還來仍以延暦三年申官始令家
守講授三傳雖然未有下符難輒爲例自此厥後二
三學生有受其業即以彼傳冀預出身今省欲試恐
違令條將從抑止還惜業絶竊撿唐令詩書易三禮

三傳各爲一經廣立學官望請上件二傳各準小經
永聽講授以弘學業仍請官裁者太納言從三位神
王宣奉勅依請學令集解これぞ古昔の學規なるなり
詳ゆゑ令式等の書を見てこゝろ得べし
學令曰凡禮記左傳各爲大經毛詩周禮儀禮各爲
中經周易尚書各爲小經通二經者大經內通一經
小經內通一經若中經即併通兩經其通三經者大
經中經小經各通一經通五經者大經並通孝經論
語須兼通とありさて經を大中小とて分つこゝ唐書
選舉志ゝ見えゝり全く唐ゝ制ゆゑ卷帙の多少ゝあれる

の〻別る義あるふなり〻明の陸深云唐制以禮記春秋左氏傳爲大經詩周禮儀禮爲中經易尚書春秋公穀傳爲小經當是以簡帙繁簡爲次第爾（燕閒錄）

天長元年八月二十日官符曰緬尋古典歷覽前王勞於求賢逸於經國伏望諸氏子孫咸下大學寮令習讀經史學業足用量才授職者宜五位已上子孫年二十已下者咸下大學寮（類聚格）職原鈔曰大學寮者四道儒士出身之處和漢最爲重職紀傳明經明法筭道謂之四道又曰凡四道儒者第一等秀才第二等明經第三等明法第四等筭道也（秀才ハ紀傳の儒をいへり）神

皇正統記曰古〻へハ詩書禮樂をもちて國を治る四術とす本朝ハ四術の學をたてらるこゝをたしかゝ〻れど紀傳明經明法の三道ハ詩書禮を攝もてきふこゝを筭道を加へて四道といふ代〻ハ用ひらるゝその職を持ることあれバ委しくきるにあらずと見えたり四道の學紀傳道を第一とし明經道ハこれなぞらへ後ゆゑ文章博士ハ從五位下の官明經博士ハ正六位下の官ありこゝをもて吾邦古來より史學を先とせるこゝをもてぐし古ふみをぶゆ君子以多識前言往行周易といへり振古治否の顛末を詳ら

せんこと其功尤史學ニ在六史日本書紀・續日本紀・日本後紀・續日本後紀・文德實録・三代實録○この中ニ日本後紀の一書なりしかく已ニ絶ヘたり今寫本ゆく傳ふるものハ偽書ありよつて鴨祐之舊史の亡逸を惜ミ日本逸史を編輯して其闕を補ハ近來温故堂ゆく日本後紀十卷を校刊もしれど後紀の眞本ハ久〳〵絶ヘく久しき古史の再世ニあハ〳〵ことを幾缺とのくども〳〵以て嘉賞もとなし　三鏡水鏡・大鏡・增鏡を始めとして野史家乘もまた少からず其文の巧拙を論せば事實を研究し治亂の由を討論もとめて古今の時世を論ぜん神皇正統記ぞ始めあるべきなり讀史餘論・保建大記等の書を讀てその概略を知るべし博聞廣覽有見識且久經歷世變者可以是非於古今處乎寡過苟見聞寡陋涉世亦淺而無見識者未可以

議天下古今之善惡也慎思録如記誦文辭之學恥一字之不穩一物之不知者恥非其恥而恥心亡矣所謂嬖孽奪宗認賊爲子之弊也天民遺言古來より學問を博洽を貴ぶといへども考據精確こうの條貫なくして其弊乖誤麗雜ニ至らざることを得ず又讀書ハ精細を要とすれども稗官諸家ハ博覽なくされバ其弊孤陋寡聞の誚をまぬれ難し博文約禮ことあるまほしくそれ昔よりもとゞく學問といへバたゞ漢學のみを吾邦の古しへのことを殊ニ學ぶるぞハ無ましバ博識といふべき人を只漢籍のみをぞ知ることをよく知まるのみあり吾邦の典故ゆを

うとく昧うるしゆゑふ年月を歴く古言古意ハ漸ゐ
うせゆくつ世よられを知まる人もあくなれるありされ
ども猶和學といふ一家の學ハあくてふふ儒生の兼通
せ〜こゐゆて世ゝの日本紀講筵ゐとゝな其時の宿儒
博達の人ゐ任せられしあるを別ゐ和學を專業とせ〜
人ありといふこゝも聞えば世人の近きを捨く遠きを
ゝゝめ目を賤め耳を貴ぶと人情の習ひとゝもいへ
ども吾邦の史學をバ必講究をべ〜凡國體ゐ關係
をるところ佛の印度の佛說和蘭の曆法の如ゝも
敢て廢をべ〜ま〜傍窺ふべ〜ありれども初學の

急務ゐあ〜べ
唐之刑書有四曰律令格式令者尊卑貴賤之等數
國家之制度也格者百官有司之所常行之事也式
者其所常守之法也凡邦國之政必從事於此三者
其有所違及人之爲惡而入于罪戾者一斷以律唐書刑法志
吾邦古昔專唐制ゐ遵みよりく後律令格式の
撰あり弘仁格序曰律以懲肅爲宗令以勸誡爲本
格則量時立制式則補闕拾遺四者相須足以垂範類聚格
令式いま猶存せるも式五十卷全く存す令十卷今倉庫醫疾の二篇を佚す
律格ハ二書ゝ全く亡逸すとのへどゝも殘缺纔ゐ存す

律十巻今四篇類聚三代格三十巻今六巻を存せり これ以て文明れ美政を伺ふべし
法家の書金玉掌中抄裁判至要抄法曹至要抄等
あり及び貞永式目建武式目れ類少々ず初學の士
宜しく講習もべし
有文事者必有武備有武事者必有文備孔子家語文武ハ
表裏の如し偏廢もべからず續日本紀和銅五年九月
己丑太政官議奏曰建國辟疆武功所貴設官撫民
文教所崇まさに神皇正統記曰坐して以て道を論
ずるハ文士の道なり此道ハ明らかならざるハ相とも伍に
たゝかひ征て功を立つるハ武人のなすなり此もぞ

譽れあるべ將ともるよろしきなり文武の二ツを
あらぬ〳〵も捨たまふべからず世亂れる時ハ武を右
ゆ〳〵文を左とす國治まれる時ハ文を右ゆ〳〵武を左
とするなり宋の陳亮云文武之道一也後世始岐
而爲二文士專鉛槧武夫專劒楯彼此相笑求以相
勝天下無事則文士勝有事則武夫勝各有所長時
有所用豈二者卒不可合耶吾以謂文非鉛槧也必
有處事之才武非劒楯也必有料敵之智才智所在
一焉而已龍川文集　むかし大江匡房卿義家朝臣ハ兵法を
授け義家朝臣もまた武人ゆ〳〵て其教をうけられる

こと古今著聞集曰義家朝臣十二年合戰の後宇治殿へ
參りて戰ひの間の物語りヤ申るを匡房卿よく〳〵聞く
器量いかゝこそ武者なれども猶軍の道をバ志ぬ也
獨ごとふいそれるを義家の郎等聞てけやきこそ
のこまゝの人なと思ひ申るを程よ江帥出られるを
やがて義家も出るまよ郎等かゝる事をこそのゝしり
けるとと語まるれバさゝめて樣あんとゝいひく車に
のられるとこそ會釋せしもとりやがく
弟子よなりてそれより常よまうでゝ學問せしれり其後
永保の合戰ひ時金澤の城を責めるよ一行の雁飛さりて

刈田の面ふわりんとゝるが俄よ地どろきて はゝ〳〵
そぐりく飛歸るを將軍あやゝくかつぎを地さへく
先年江帥の教たまへるこゝろ夫軍野よ伏ヒ時ハ飛雁
つゝをやがる此野よかゝるに敵ふたぐしかゝめ手を
まうけびきよ下知せゝれバ手をうちく三方をまく
時わんのごとく三百餘騎をかゝ地きこりる兩陣
みゝまあひく戰ひとかぐりやゝされどもかゝくさとる
めるこゝろれバ將軍ひ軍勝よ乘じく武衡等ゲ軍破
まふるを江帥の一言あゝまゝうバあぶあゝまゝ也
いとゝるまるゝ文士ものさり武を講じ武

人もまゝ文を學べゝと自聖言の旨趣よこのゆゝこゝを
仰慕をゝぶゝ
讀書いゆゝへハ必師傳よゝぐれバあゝこゝびあゝいも爛
脫傳受をといふこゝもありとゝぞ江談抄曰史記爛脫ハ
只三卷也本紀第一第四第五傳也後漢書ニハ廿八將論也とゆゝも
ゆゆゝふ史漢をゝもかゝくよゝまんゆハ經傳もさゝるこゝぞあゝんと
思へゝりゝふ金澤本羣書治要の裏書ハ爛脫の一說あり
先讀經元年一更返讀傳惠公元妃孟子至隱公立
而奉之次讀傳元年春王周正月以下云云故定安
說也信俊眞人說云云此說可奇序云云故傳或先

經以始事或後經終義正義之先經者若隱公不書
即位先發仲子歸于我衞州吁殺其君定先發莊公
娶于齊如此之類是先經也云云註無其意正義又
如此以之知此說非矣予又不傳此說耳これもそのこゝ
大概を知るべゝ吾邦ハ史ゆゝ又亂脫あり釋日本紀
亂脫の條曰第一亦曰葉木國野尊亦曰見野尊師
說見野尊之次可讀葉木國云云亂脫是也或又直
讀之とゆゝも按ずるふ爛脫と云ハ錯簡のゝゝハ聞ゆ
もゝど今よりゝゝそゝいゝふゝぞゆ其妄ゝゝきゝゝハ知べゝゝゝ
只古昔かゝることゝもありと好古の士ハ辨へゆゝべきゝゝぞゝ

昔對策及第することを桂を折るといへるは晋の郤詵が故事によれり 晋書本傳曰郤詵字廣基濟陰單父人也父晞尚書左丞詵博學多才瓌偉倜儻不拘細行州郡禮命並不應泰始中詔天下舉賢良直言之士太守文立舉詵應選云々武帝於東堂會送問詵曰卿自以為何如詵對曰臣舉賢良對策為天下第一猶桂林一枝崑山片玉帝笑 登第の學士は宴會を折桂會ともよび倭名類聚鈔序曰思拾芥者好探義實期折桂者競採文花扶桑略記曰前總州刺史孝標者菅家末葉也雖為折桂之身敢非滄花之才などもみえ又續世繼物語曰後一條院上東門院に御行ありて桂を折試みさせたまふ題霜をおく菊の盛をすぐるまで緑の松色をあらたむる

ことかどぞ聞えし抑道長おほきおとゞ奉らせたまへるとかや拾遺和歌集に菅原の大臣かうぶりし侍りける夜母のよみ侍りける 久かたの月のかつらも折るばかり家の風をも吹せてしがな堀河院次郎百首に桂のこゝろを仲實朝臣 我身には吹べき風のふきこねば桂の枝もをらでぞありける 俊頼朝臣 人しれずなげきをしまつとかぜたえぬ桂の枝を折もよろこびに 五代の邱光庭云代人謂及第人為折月桂着明曰昔郤詵射策登第天子問之曰卿自以為何如對曰臣以為桂林之一枝崑山之片玉今人謂為折月桂何其謬歟 兼明書 自唐以來用之温庭筠詩

云猶喜故人新折桂自憐羈客尚飄蓬其後以月中有桂故又謂之月桂月中又有蟾因以登科爲登蟾宮用郗詵事固已可笑而展轉相訛復爾文士沿襲未之思也天祿識餘

時ハ吾邦の學士もまゝ彼邦の稱よりとりをゝくゝ

歌林拾葉集ニ月の桂の攀ゝゝゝを折と云たとへゆく及第難きことをいへゝゝゝひゞこゝゝあれども唐世已ニ月桂れ謬りあれバ其來ることひさゝ〳〵天滿宮故實ニ月の桂を折とハ及第したる人ゆゑ桂の枝を賜ふる故なりといふを據もなき妄說なり

桂林遺芳抄といふ古書あり學問料より始め入學吉書進士課試等のことを記せりこゝまゝ郗詵ゞ故事ニよりて書名あるゝ〳〵

大學寮の書生ニ學文料を給ふとあり應和二年四月廿五日請課試文章得業生狀曰右雅材等二代儒胤一時俊才天曆十年共給學問料天德元年同補得業生味道之志門塵雖芳揚庭之望家風未扇伏尋延喜新制秀才課試之期以滿七年爲限延喜末歲已來亦有相准之法以給料之二年當秀才之一年藤原經臣給料勞四年秀才勞五年被許登省是其始也類聚符宣抄

火ともしのぞこともいとり延喜大學寮式曰凡諸博士學生等計宿給燈湯料錢まゝ續世繼物語曰長久四

年の三月ゆゑ佐國孝言時綱國綱などいふものども
試みさせたまひしき弓場殿わざと作りて奉りるもや
桂を折りたる博士をのぞみまゐらせぬ者ハ燈の望ちん
ありる句毎ゑ唐の博士の名ゑど置られバ作まかるる
人難くちんありる千載和歌集ゑ大江匡範ハ學文
料ゆゑべりるるをたまふべ侍まるるとき人の訪へる
かへりごとよみてつりる歌　はるひもも十夜ゑあるれる
とりびのうげかゆゑる心ゑるを

程朱の學世ゑ行りるをハ惺窩藤先生より始るる如く
はゆゑどたゆゑく玄恵法印ぞ嚆矢ありる尺素往來曰

清中兩家之儒傳師說候侍讀歟傳註及疏並正義
者前後漢晉唐朝博士所釋古來雖用之近代獨清
軒玄恵法印宋朝濂洛之義爲正開講席於朝廷以
來程朱二公之新釋可爲肝心候也こゝを程朱學を
朝廷ゆく聞しめられし始ゆるべし　國朝諫諍錄引長廣
濟草曰河内守廣信勢州垂水人也後醍醐帝登祚之初入京勤仕於
省中上諫疏奏不報廣信便去歸於勢州與妻子耕
于垂水帝徵不至時正中元年也初廣信在京常與
藤房論學一日語藤房曰宋大儒朱晦庵之書前此
六年始入本邦世儒未有知焉我幸得之深尊信之
請今借之宜覃思於斯書藤房諾然藤房之學雅混
儒佛以故卒與廣信不合懷齋云見其曰方得晦庵
之書始入本邦以尊信之則廣信是今日讀朱詩者
之師祖乎尤可仰慕焉かれバ玄恵ゑ先ゞちて朱學を
唱しめられども此事甚ゞ疑ふべしそのゝしハ

兵家茶話に曰、玄信といふ人あり諸家の系圖を記憶して望ゆまうせ妄作しるこの時二山彌三郎義長といふ人あり始めは陽明の說を説き後程朱の說に歸して其名高くなりぬ玄信ゆくゆく彼人のもとに行く諸家の事ども物語し侍るなるなり義長が妻は垂水某の女なりあるる垂見氏は伊勢の國司に仕へ来る者といひ傳へしれども書つくへるものあるれば此をもつくつくも考へ合はせ擬もあるいと本意なくさてく語られしは玄信やがて中藥伊勢に垂水河内守廣信といふ人あり朱註の四書を信じて万里小路藤房卿に奉る後嘉文亂記を述作したりといふ其事跡は長濟草といふ書に詳に候記憶し侍れば謂く聞せまゐらせんとて書に向ひ向ひ見るが如く少しのとがもなく全篇讀み侍れば義長感ト入く今ひと通り讀たまへ手書し侍らんといへば玄信諾して よむを一字の誤りなく手書して稱美甚だし秘しく人にも見せぬ程しが京都の藤井懶齋と義長同ト學流なれば或時彼長濟草を書寫しく贈る藤井氏諫諍錄述作のくさく長濟草を引く垂水廣信を載せくり云く垂水河内守廣信といふ人實錄雜記にもかつくあき人にて玄信が偽作の長濟草を實記と見く書に記せして天下に行ふ抑もの不一人虛を傳へるとありくさ蓋しこの謂哉とぞ實に此說の吉野先主之如くなるとくさは妄誕無稽辨を待たしして知るべし

時獨清軒健便始唱程朱之義近至于惺窩藤先生講學教授興斯學於既絶濂洛關閩之學至此始盛後之學者孰不受其賜本朝くさふ次で羅山先生孔程朱の學風を唱へられしは海内靡然くさく風に嚮ふこれより後此學派いと多くれどその源を惺窩羅山の二先生ありそもその學派のもとれるよりかつ傳統の委しきことは斯文源流一卷河口遠撰光ありまつて こくに記さず

今古學朱子學の稱あり昔は新舊二義といふ僧義堂が日工集に曰、康暦三年九月廿二日余以事謁上

府府君出接余云く昨日儒學者講孟子書其義各各不同如何余曰所見不同也近世儒書有新舊二義程朱等新義也宋朝以來儒學者皆參吾禪宗一分發明心地故註書與章句迥然別矣廿五日又見問儒學新舊二學不同如何曰漢以來及唐儒者皆拘章句者也宋儒乃理性達故釋義太高其故何則皆以參吾禪也尚直編曰晦庵註書惟毛詩一經乃是學力註成簡用佛法自餘四書等註并諸製作皆用佛法汎以佛經禪語改頭換面翻變其語而取其意如是用者逼於羣書邪の緇流のごとくず唐主ゆゑくも朱子參禪の說はたゞくより有るん

學校

善相公意見封事曰伏見古記朝家之立大學也始於大寶年中本朝文粹ちゝあれど懷風藻序曰及至淡海先帝之受命也恢開帝業弘闡皇猷道洽乾坤功光宇宙既而以爲調風化俗莫尚於文潤德光身孰先於學爰則建庠序徵茂才定五禮興百度憲章法則規模弘達曳古以來未之有也日本書紀曰天武天皇四年春正月丙午朔大學寮諸學生云云こゝの文ふよる時ハ學校の設ケぬく已ふ天智天武の朝よりあるとゝくども令續紀及び武智麻呂家傳等の書を按ぜるふ大寶年中よ至ってゝ初めく何事も盛ふそのゝ

完備せ〜こと〜ぞ坤〜も〜〜武智麻呂家傳曰大寶四年三月拜爲大學助先從淨御原天皇晏駕國家繁事百姓多役兼屬車駕移藤原京人皆忙代不好學由此學校凌遲生徒流散雖有其職无可奈何公入學校視其空寂以爲夫學校者賢才之所聚王化之所宗也理國理家皆賴聖教盡忠盡孝率由茲道今學者散亡儒風不扇此非所以抑揚聖道翼贊王化也即共長官良虞王陳請遂招碩學講說經史浹辰之間序序鬱起遠近學者雲集星列諷誦之聲洋洋盈耳慶雲三年七月徙爲大學頭公屢入學官聚集儒生吟詠詩書披玩禮易揄揚學校訓導子衿文學之徒各勤其業和銅元年三月遷圖書頭兼侍從公朝侍內裏披候綸言爰以其間撿校圖書經籍先從壬申年亂離已來官書或卷軸零落或部帙欠少公爰奏請尋訪氏間寫取滿足由此官書髣髴得備ゆゆしか此公なくりせばかどろ斯道の衰へぶ〜て今日よ至るこを得べくんや實ふ孔氏の功臣ゆ〜〜搢紳の師表とも謂つべし

學校の治道よ切なるこ〜〜今さら〜いふべくもあらぬ後世猶道を重んじ治を求むるの明王こゝに設を欠

たることなりしも今の京となりても大學寮の制度完備せるあり弘法大師の綜藝種智院（見續性靈集補闕鈔）檀林皇后の學館院（見文德實録）を始め藤氏は勸學院（見類聚格所載貞觀十四年十二月十七日官符）源氏の芳學院（見西宮記日本紀略）和氣氏の弘文院（見拾芥抄）菅家の文章院（見朝野羣載）あゝ何くもと盛んなりしを世換り風移り次第に廢滅し中間數百年の兵戈に跡くもなくなりたるは寔に惜むべし學校の衰つゝ世の衰ふる基となることは是れ其時の人の治道よろしからざること亦知るべし國家の柱石なる人豈心をこゝに留めざるべんや

學令曰凡大學國學每年春秋二仲之月上丁釋奠於先聖孔宣父其饌酒明衣所須並用官物義解云謂釋釋菜也奠奠幣也祀其先聖以示敬道宣父是孔子謚也謚法施而不有曰宣也あゝ儀注の委しき

釋奠を行ひしは始め續日本紀曰文武天皇大寶元年二月丁巳釋奠とあるこれ此後元正天皇養老四年二月乙酉造釋奠器聖武天皇天平二十年七月癸卯改定釋奠服器及儀式稱德天皇神護景雲元年二月丁亥幸大學釋奠これら續紀に載るところを

そもそもの次第はその禮及び器物も備はりしごとくあれども光仁天皇寶龜六年十月壬戌眞備公の傳は神護二年任中納言俄轉大納言拜右大臣授從二位先是太學釋奠其儀未備太臣依譽禮典器物始修禮容可觀とあれば此時のぞ實は完備せりと見えて意見封事は始於太寶年中至于天平之代右大臣吉備朝臣恢弘道藝親自傳授即令學生四百人習五經三史明法筭術音韻籀篆等六道とのたまふ併せおこなはしめられど中間たちまちに廢絶せしかども後拾遺往生傳曰亭子親王諱恒貞者淳和天皇第三子也奏曰皇太子當釋奠禮大學是舊儀也此禮久廢未知所以也天皇曰昔天平末大臣吉備眞吉備勸高野天皇幸大學行此禮其後八十餘年廢而不行今太子心存興復甚以佳也即敕皇太子率百官奠二季かくれば亭子親王こそ此禮は於て實に繼絶興廢の功ありといつべくれども後國史は往々記せとそろそろこれこそ此禮の絶えざるこそとそろくし三代實錄曰貞觀二年十二月八日新修釋奠式頒下七道諸國こと見え菅家文草に仁和二年正月十六日任讚岐守られしかし州廟釋奠有感の詩あり丁趨一拜

意如泥蹲俎蕭疎禮用迷曉漏春風三獻後若非供
祀定兒啼さて高倉院安元三年釋奠於太政官廳
行之依大學寮炎上也今按此以後大學寮不建故
歷於太政官廳行釋奠後花園院康正元年八月十
四日丁巳釋奠今按康正以後有長祿寛正之亂繼
有應仁文明之大變洛中爲焦土朝政悉廢釋奠亦
絶（兩朝時令）さて慕京集ハ二月の釋菜金澤文庫ゆく
行ふ三好日向守勝元の許よりゆきされたる
隣家梅花とりよ題を聖供よそへくつゝ侍るさて
さるれやよ友垣の近きハ遠きもゝ梅乃下風や

見そゝるハその頃静あぐるもゝ世中ゆくたゆく釋菜
行ふ事ゝ事ゝとめゝゝしゝゝあるさて近く江戸昌平
坂の聖廟ハ於て再び釋奠の禮行ふもゝより今ハ至る
儀制まゝ備ふるこそ實ハ文運の至隆ゆゝく教
化の淵源とそいつゝ
新葉和歌集ハ妙光寺内大臣の年中行事三百六十
首の中ハ釋奠をよめる歌かゝ人のむゝれゝげをうつ
きて仰ゝバ高き秋のよゝ月年中行事歌合ハ二位中將
（四辻善成卿）の釋奠をよゝる唐びゝれかゝゝゝげをうつ
とめ印ゝもの時とゝみまつゝ

續日本紀曰稱德天皇神護景雲二年七月辛丑大學助教正六位上膳臣大丘言大丘天平勝寶四年隨使入唐聞先聖之遺風覽膠庠之餘烈國子監有兩門題曰文宣王廟時有國子學生程賢告大丘曰今主上大崇儒範追改爲王鳳德之微于今至矣然准舊典猶稱前號誠恐乖崇德之情失致敬之理大丘庸闇聞斯行諸敢陳管見以請明斷敕號文宣王と見えたり　按魯哀公誄夫子曰宣尼父蓋當時列國大夫謚必配字曰武伯平仲之類故哀公曰爾自是而降封贈之典沿革不一至唐玄宗時始封王爵曰文宣王粟田眞人之聘唐適在其時故大丘聞而奏之朝此本朝天子稱王之始也本朝專遵唐禮只當稱文宣王不必可從宋元明之制也（盍簪餘錄）

經籍

古事記應神記曰百濟國主照古王以牡馬壹足牝馬壹足付阿知吉師以貢上此阿知吉師者阿直史等之祖亦貢上橫刀及大鏡又科賜百濟國若有賢人者貢上故受命以貢上人名和邇吉師即論語十卷千字文一卷幷十一卷付是人即貢進此和爾吉師こゝに經傳は文章等の祖史は見えゝ始ゆく文學の行はるゝもまゝ此時ゆゑ

あゝぐき日本紀竟宴哥に橘直幹が王仁をよめる
和多津見野千倍野四羅奈身古江天沽曾八島乃
國爾布箕波都太不禮ま〻濫觴抄曰應神十五年
甲辰百濟國始獻書籍文字又云八月百濟貢良馬
二疋典經諸物博士等
五經博士の名日本書紀繼體紀七年六月に見えたり古
者以易書詩禮樂春秋爲六經至秦焚書樂經亡今
以易詩書禮春秋爲五經初學記吾邦あるひはこれゐ異
なるものあり釋日本紀曰五經禮書樂書論語孝經
尚書也上謂之五經加兵書爲六經ま〻家法倭點

曰六經者五經加孝經也とものべり
異制庭訓往來曰元正天皇靈龜二年吉備大臣率
六藝達者一百餘人入唐習五經十三經諸子百家
及諸伎藝聖武天皇天平七年歸朝と見ゆされど吉備
公の文學ゐ功あるをハ古書に往〻載とゝぐも十三經傳來の
をかつて見えぐれバ其說の是非ハ詳ならねど吾邦に十
三經の名を傳あるをもて久〻〻證とハなゝ拾芥抄曰
毛詩尚書禮記周易左傳已上謂之五經周禮儀禮公羊傳
穀梁傳已上加之謂九經論語孝經老子莊子已上加之謂十三經及
撮壤集聖鬮贊に載るものこれと異あるをもて老莊の

二書をもて經傳とせしことこれもく分明なるを藤貞幹が古來老莊の二書を經傳に加ることは好古日録といふものハ深く誓へざるれ謬りなり運歩色葉集ゆも經書の目を載せ老子經二卷莊子廿二卷已上經家書とも見えたり漢籍ゆも徵とすべきものあり唐の陸德明が經典釋文に老莊の音義ありく孟子なし老子本子書漢景時始改爲經焦氏筆乘唐に至りく令弘文崇文國子生季一朝參及注老子道德經成詔天下家藏其書貢舉人減尚書論語策而加試老子唐書選舉志など見えく經家なるを疑ふべし

明の顧炎武云宋時程朱諸大儒出始取禮記中之大學中庸及進孟子以配論語謂之四書本朝因之而十三經之名始立日録知られるごとき十三經の名ハ明に始まりし如く聞ゆれども吾邦にもくその目を傳ふることある時ハ唐土ゆも必後世のとふハあるべく思ひしりふ已ゆ石室十三經孟蜀所鐫故周易後書廣政十四年歲次辛亥五月二十日唯三傳至皇祐初方畢故公羊傳後書大宋皇祐元年歲次己丑九月辛卯朔十五日乙巳工畢周易孫逢吉書尚書周德正書毛詩張弼文書周禮孫羽吉書儀禮

張弨文書禮記張弨文書春秋經傳公穀不題書人
論語爾雅張德釗書孝經孟子不題書人玉海まゝ宋
の周密云寥羣玉欲開手節十三經註疏姚氏註戰
國策註坡詩皆未及入梓而國事異矣癸辛雜識後集かく
ふるく十三經及び註疏の名さへ見ねれバ況や其目を
猶そゆく既よりあるを知るべし顧炎武ゞ本朝よ
始まりとゝのとの千慮の一失とやいふべし
四書の名吾邦ゆくふるく見ゆるハ日工集康曆三
年九月廿三日條よ四書盡於朱晦庵庵及弟以大
惠書一卷爲理性學本云云康富記嘉吉二年十二

月十三日是日室町殿孝經被遊終云ゝ此後四書
可被遊之大學可有御始之由被申之後小松院被
遊四書之間如此云ゝ卧雲日件録寶德元年閏十
月三日條よ竺萃曰吾翁大椿筑紫人也少年東遊
就常州師學四書五經ゟど見えそう始めく船來廿八
何きの時ゟ日野弘資卿手録よ四書ハ正嘉の頃始
めて渡るるよ見ゆ好古日録ともいひまゝ元應元年
十月四書集註始來南山年録編ともいひまゝ明の顧炎
武ゞ宋時程朱諸大儒出始取禮記中之大學中庸
及進孟子以配論語謂之四書といふど中庸の單行

已ふるき晉よりあり中庸雜出戴記至二程始尊信而表章之今獨行與六經並按晉戴顒嘗傳中庸後梁武帝亦爲中庸講疏中庸之傳久矣非但始於宋也（千百年眼）まゝ康冨記曰中庸註事以本經爲家說不被執新註之由事仁安比有大外（類業）記殿奥書件年當淳熙己酉也朱熹新註未渡時節也自然相叶道理奇特之到也とあるハ和漢同轍と云べし（後世も中庸を重せられしとハ園大曆康永三年十月廿一日條ヨ傳聞今日上皇御幸萩原殿資明卿隆職卿行親朝臣已下依召參仕有禮記中庸御談議釋圓月自歷譜曰觀應元年三月下利根止〻庵夏藤谷素一素璞問中庸ちゞ見えり）かり孟子を經とするとも唐の揚綰その始め

みゝ宋よりあゝびされど方今和漢とゝゆ朱學の專ら行ハるゝとゝ蓋しゝゝゆ胚胎ゝゝゆゝん

續日本紀曰天平寶字元年四月辛巳古者治民安國必以孝理百行之本莫先於茲宜令天下家藏孝經一本精勤誦習倍加發按ぜるゝ唐の玄宗天寶三載十二月詔天下家藏孝經（唐書本紀）ゝあれバ吾邦ゆもかるゝとゝ聞たまゝゝ號令ありと見えゝり其相去るゝゝ二十年ゆ滿ゝゝ是まゝ孝道を弘めたまゝゝ一端なり（制度通）まゝ三代實錄曰貞觀二年十月十一六日壬辰制哲王之訓以孝爲基夫子之言窮性盡

理即知一卷孝經十八篇章六籍之根源百王之模範也然此開學令孔鄭二註爲教授正業厥其學徒相沿盛行於世者安國之註劉炫之義也今按大唐玄宗開元十年撰御註孝經作新疏三卷以爲世傳鄭註比其所註餘義理專非又誓之鄭志康成不註孝經安國之本梁亂而亡今之所傳出自劉炫事義紛薈誦習尤艱靡厭衆止更招疑義故玄宗廣酌儒流深廻睿想爲之訓註冀聞微言即勅學士儒官僉議可否於是當時有識碩德名儒咸集廟堂恭尋聖義妙理甚深常情難測同共嗟伏服請頌傳侍中安陽縣男乾曜等奏曰天文昭爛洞合幽微望即流行佇光來葉制曰可然則孔鄭之註並廢於時御註之經獨行於世而唯傳彼註未讀件經假之通論未爲允愜鄭孔二註即謂非眞御註一本理當遵行宜自今以後立於學官教授此經以充試業庶革前儒必固之失遵先主至要之源但去聖久遠學不厭博若猶敦孔註有心講誦兼聽試用莫令失望かゝる詔旨あれバ吾ガ邦古來より御註を用ふるを故實とし學令の文を按ずるに孝經孔鄭の二註當時全く存せり今世に傳るところ即當時存する所の本なり

孔註ハ太宰春臺已ゟ校刻せり鄭註ハ羣書治要ゟ載
せるもの是あり近來尾藩の學士これを表出し〳〵世ゟ
傳ふ　世ゟ讃岐の良芸之裔然の遺本を得て刻せる
ところの鄭註ありて明の許朝宗が僞造あるよし
又清の趙起蛟集解ゟ鄭氏曰と稱せるものも亦御註の文なりとのことなりひまぐ〳〵べう〳〵ず　二書ともに唐
土へ渡〳〵ゟ彼邦ゆゑも殊ゟ貴重〳〵く清の鮑廷博が
知不足齋叢書中古文孝經孔氏傳第一集ゟ収めゆ孝經鄭註第廿一集ゟ収めゆ
刻〳〵く舶來せり
天子の御讀書始ゆゑ必孝經を用ひたまへり三代
實録曰貞觀二年二月十日辛卯從五位下行大學
博士春日朝臣雄繼以孝經奉授天皇續世繼物語

曰宮の御ふゝたぐめて式部大輔たゝちときこえ〜
たりせ御註孝經とゝ〳〵書をしへたてまつりてゝ〳〵人
さねまさ尚復ゝくそれも御師あるべ〜とあり武家
ゆゑもまゝく孝經を用ひらるゝことを吾妻鏡建仁四
年正月十二日將軍家御讀書孝經始相模權守爲
御侍讀ゟゝ元久三年正月十二日今日將軍家御
讀書始相模權守仲業束帶爲御侍讀時剋持參御
註孝經ゝゝ〳〵いづれも御註を用ひらるゝ蓋し貞
觀の詔詞ゟよるものなるべ〜又千字文をも用ひたまふ
ことあり　三代實録曰貞觀十七年四月廿三日皇

太子始読千字文扶桑略記曰浄蔵僅及四歳読千字文など見ゆ千字文ハ已に古事記に見えて論語とゝもに吾邦に流傳せるを最ふるきものとて世にも重く用ひられしことしるしうつぼ物語楼上巻栄花物語玉臺巻など古書往々にその名見えたり

學令大学寮式並に孟子の書なし其書もと経家にひろざるものとなり唐時孟子之書儕於諸子不得列於大小経之数故陸徳明経典釈文有老荘而遺孟子金石萃編石刻十二経條已に唐の魏徴が群書治要に孟子を経伝に列ねずして諸子の始に置たり吾邦専ら唐

制に遵ふ孟子を経に収めざるハこの故なり孟子を経とせしことハ唐の楊綰その嚆矢なり唐書選挙志曰宝応二年礼部侍郎楊綰上疏言云云論語孝経孟子兼為一経陔餘叢考曰孟子書漢以来雑於諸子中少有尊崇者自唐楊綰始請以論語孝経孟子兼為一経未行韓昌黎又推崇之其後皮日休請立孟子為学科其表略云聖人之道不過乎経経之降不過乎史史之降不過乎子子不異道者孟子也捨是而子者皆聖人賊也請廃荘老之書以孟子為主有能通其義者其科選同明経則宋人之尊孟子其端発於楊綰韓愈其説暢於日休也按ずるに皮日休が表に荘老の書を廃し孟子をもて主とせんとのゝるハ老荘の経家なる一証とすべし條と併せ見るべし十三経のまさしく経とせしことハ宋の王応麟ぞ始めなるべき玉海○古経解鈎沈序曰唐宋書自孟子入丙部玉海始列在九経吾邦中葉に至りてもなほ施行の書にあらじ卧雲

日件録文安五年五月五日條ニ吾朝用漢土書必
有朝廷施行之命如孟子則未施行之書也かゝるめる
ふや唐土ゆく吾邦のことをいくるゝ四書則重論語學
庸而惡孟子武備志凡中國經書皆以重價購之獨無
孟子云有携其書往者舟輒覆溺此亦一奇事也五雜
組ことゝのことゝ異邦傳聞の妄謬をゆゝより辨を
待ずとゝ吾邦古昔孟子を重んぜざるは一證
とゝもゝぞ〳〵
經籍の彼ニ佚〳〵此ニ存せるもの少〳〵彼邦の史
云其國多有中國典籍裔然之來復得孝經一卷越

王孝經新義第十五一卷皆金縷紅羅標水晶爲軸
孝經即鄭氏註者越王者乃唐太宗子越王貞新義
者記室參軍任希古等撰也宋史近來已ニ佚存叢書
ありゝ〳〵彼邦ゆくも已ホ徐福行時書未焚逸書
百篇今尚存歐陽文忠公全集日本刀歌
佛典殊ニ多し神皇正統記曰唐國ゝぐれしより經教
多く失ぬ道邃より四代ニあゝれる義寂といふ人まで
唯觀心を傳へく宗儀をあゝむるをたえるゝゆゆ
吳越の忠懿王北宗の教をろへるをなぐきく使
者十人をさゝく我朝ニ教典をもとめしむ

とぐくうつゝ終まく歸まぬ義寂ことを見あきゝ
めて更に此宗を再興せんとこゝろこゝあり五代の中後
唐の末ざゐありられバ我朝あり朱雀天皇の御代あ
あくりん日本より返ゝ渡ゝる宗あれバ此國に
天台宗ハこゝりく本とあれるなり此わゝと傳教彼
宗の秘密を傳へられゝるこゝも唐の台州刺史陸 縛う印記の文あり とぐく
一宗の論疏をうつゝ國よかへるこゝと釋志磐が佛祖統記
に載り異朝の書に見えりとのへり近頃京師白雲寺の
僧慈周越中光嚴寺の僧洞水あど唐土に絶えゝる
經論を年來校索して唐土へ渡さんことを謀るゝに

素志を遂ぐゝしゝく遷化せる其書一百冊七百七
十九卷あり其詳なるこゝも日本國傳來佛書逸于彼者寄贈大清國請納之名藍以爲學匠
龜鑑狀一篇あり及び送書
目錄ゝもに一宵話に見えり
書籍古へハ竹帛なるこゝと唐土と異なるこゝあ
明の胡應麟云至唐末宋初鈔錄一變而爲印摹卷
軸一變而爲書冊經籍會通といへり吾邦も亦ゝりこれな
りて古書に多く裏書あり今傳るこゝろ古事
記裏書大鏡裏書等なり其本ハ厚き紙に書て卷
本にせゝ多く註釋をこと勘文をも其裏に書て見る
なり今の冊本の首書の如し野槌佛家ゝゝ今に

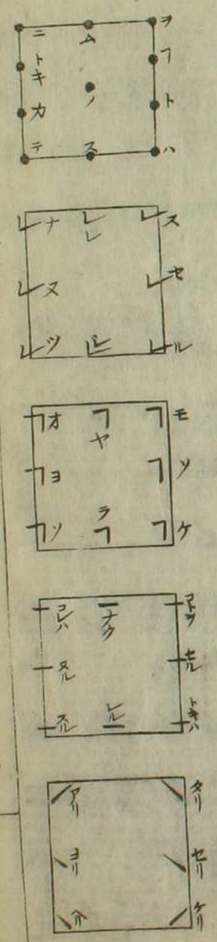
それの時ハ巻子を用ゐることあり古代の遺制を見るふ足るべし

訓點

吾邦ハ漢籍を讀ミ漢字を用ひ及び文字の音訓ともふ彼若郎子王の初めて經典を學びたまひし時より已ほこれあること疑ふべからざれバ文學の行はれしころよりそもそも和讀もることハ行はるる顛倒の讀ミ吉備公より始まるもるとひ傳ふハ謬りなるべし和讀のてふをハを忘れざるんが爲ほをこと點といふものを造り始めて文字の四隅上下ほ施こしもあとハありにし定基卿の野記ほをことハと南都

法相宗の隱點なるが其後いつしか儒家ほ轉用しもくより故實ともあれるなり常盤日記といへり此説據あるほ似たり諸家點圖を按ずるに其載るところ凡十七家多くハ寺院ほ傳ふるところれものありあつく物ハ其僧家ほ始まれるといふもの蓋し實を得たるが如しさそ緇流ほハそもそも絶えたく後ほハ博士家ほのみ傳へしあるべし

經家

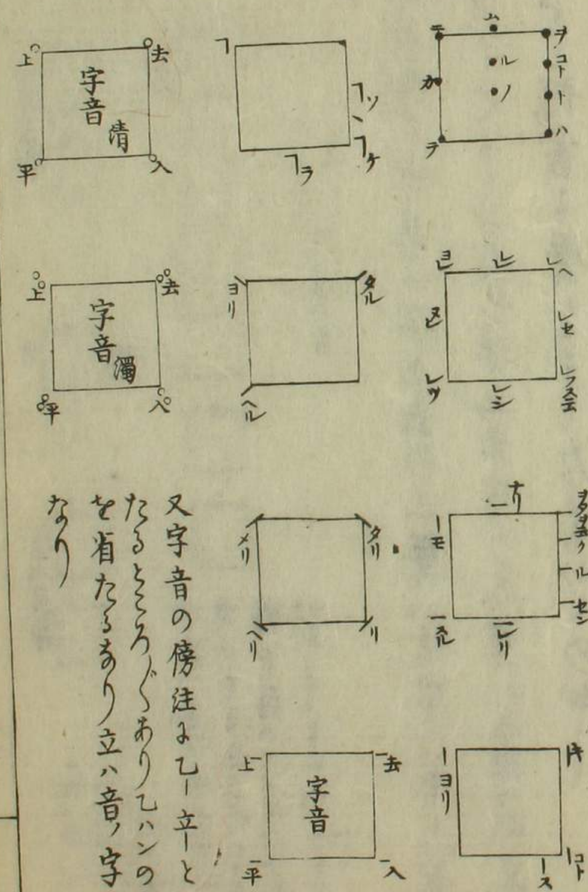


右の點圖找をこと點といふるよりハ右の傍を上より直讀されバヲコトトハとありこもふよりくをこと點といひ

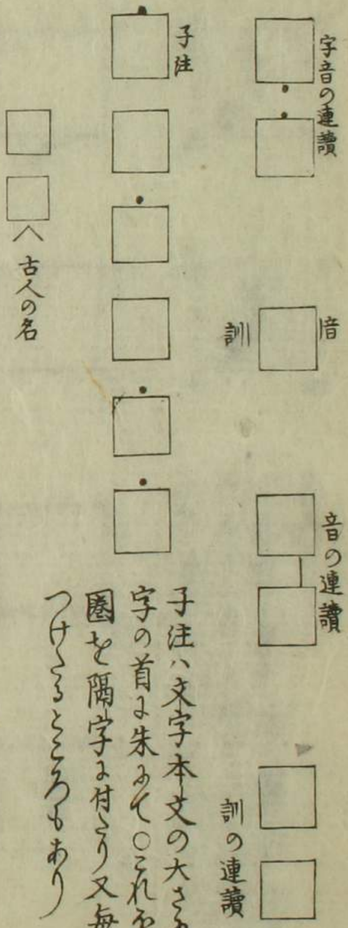
なのゝ〳〵るあり〻ゆゑふるき俗稱あるゝ〳〵或ハをこと
點といふものを論語よりとゞめくく作り出せり南留別志
ともいへり

和漢朗詠集の古鈔本を見るるとのあり〳〵ふ其本の
巻末よりをこと點の圖を載せるも抑りつふまる一種ゝ
點法ゆゑ

法家の點圖　辛酉隨筆ニ曰ク今の校合よあづかり〳〵須古本ゞるゝ
つけ〳〵る點を勘へあハせく點圖を作りとり
其後律式おどの古本を見るよりるゝ
同じくれバ法家の點一例ありそん



又字音の傍注よ乙一立一とかゝ付
たるゝゝろ〻〻あり乙ハンの字のオ
を省たるあり立ハ音ノ字の省文
なり

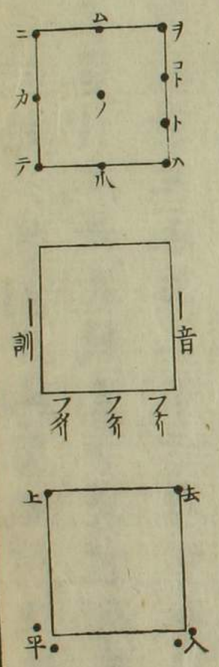


子注ハ文字本文の大さゝ
字の首ニ朱ヲ○これをの
圏を隅字ニ付テ又毎字
つけるところもあり

かくの如く字音ハ平上去の三聲ハ文字の平上去ニハ拘らぬ也ゝ入聲ハ入聲の文字ゆゑすべく何書ニ聲をさしたるもかくの如し

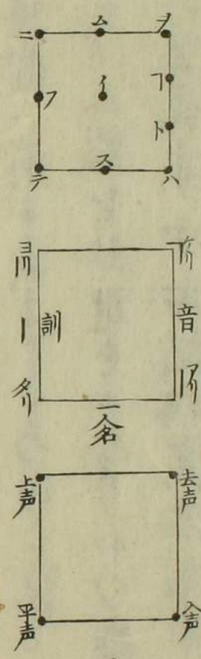
朝廷ゆゑ御書始の時ハ博士家より點圖と角筆とを調進するてゝなり　江家次第御書始條曰寛和例畫

御座西間ニ供繧繝端帖一枚ヲ為御座其前立御書案置御註孝經巻紙也又置點圖角筆等案面推紙ヲ



て點圖ハ前ニ載るところのごとと異あるとてあり　其中たゞ三圖を註進するなりかつ聊異同もあるとバ左ニ一二を載す中右記曰寛治元年十二月廿四日壬寅今日未刻許有御書始事以式部權大輔正家朝臣為侍讀以左少辨敦宗為尚復其儀如式云云

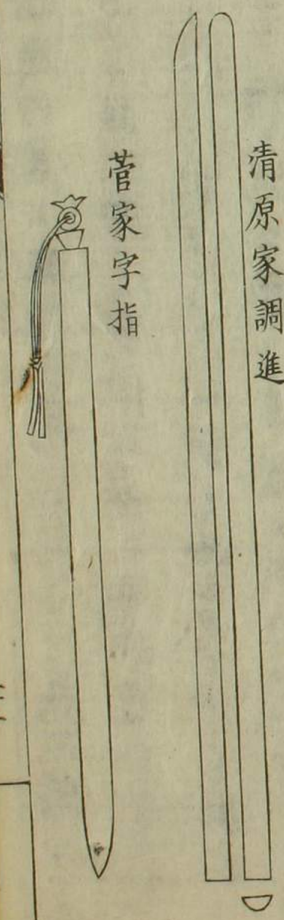
件、三點圖正家朝臣御書始、所注進也、以白色紙小作子書付之、無表紙、まゝ東宮御書始、部類記曰、後深草院御記、永仁二年六月廿五日、此日皇太子御讀書始、也云云、點圖角筆等、此兩物學士資宗所調進也、點圖白色紙書之、料紙三帳也、一枚左方點圖三置之、草紙寸法高弘各五寸、角筆長六寸、



此寸分各方一寸也

點圖と同じく調進ところの角筆といふものを今俗ゑ云字指、或い字つきのことあり、博士家授人句讀菅

原氏、削象牙如筆、上琢小浮圖、鑿孔繫細條、謂之角筆、清原氏用竹長短小大皆有定制、以指點經籍、俗云字沙、所謂代指也、三柳軒雜識曰、堀玉如筍名代指、講筵進講、時以點顯經籍、漢遺物、秋苑日渉、菅家清家その制同じくして、柳の角筆といふ名よるところ蓋し象牙をもて造るもの古制なるべし



舟橋殿の書は點をることを宜ひしハ義の聞ゆるやうなるも點ト難し宣命等みも用ひらるとかれハ讀やすく拙くぬやうなるけ聞えやすくやうは斟酌をるとあり紳書といふ實は書籍は訓點をつくるとハたやすくぬるぞあり文義をよく解さるれば聊一字のことゆく自他の差別をあやまるとを少くべ經傳ハ先註を詳は考へく義理を明やし註意は合んとを求む次は字義を能考へ正をぐし訓はよむとてゆハとハ古雅なるべし訓もてゆハも靈飾の語と鄙俗の言を禁ぶ又訓もてゆハも無用の贅言を用ひぶ音は讀んより訓は讀

ゑ字をバ訓はよむべし但音と訓と各其ところの宜は順ゆべし妄ト訓はよゑ妄は音ハよむとゑれ訓は讀て意足らぐるハ音はよむべし尊卑賢否を分ち上下れ例を考へ習俗のあやまりを察し句讀を正くす助字はあゑざる字をよゑ地べくべ前後上下同例を用ゆ是大法ありされども處はより前後同字あくも連續同じくしても訓讀音讀ゑくべし同例はかゑくべ宜は順ゆべし是訓點のあゑひなり點例あゑ次の讀法の條を併せ見るべし

書籍は點つゑゑ朱を用ゆるを江吏部集曰研朱仰

鳳點文集汗竹割雜居武城若用父功應賞子老榮
欲擬昔桓榮さて後世もをこと點ハ朱みて付訓讀歸
點ハ墨みゝ左右ゝ付るこれを朱墨兩點を加をいへり
逍遥院内府の真跡御註孝經の奥書ゝ右件本端
一兩枚有點予覓他本加朱墨兩點了于時天文第
三六月十六日凌炎蒸終功了都督郎公條とあり
又或記ゝ足利庠主寒松吾妻鏡の誤字を正し並
朱墨兩點を加へゝゝ見えゝり當時博士家の朱
墨兩點を付ゝる書を見ゝと往ゝことあり訓讀を傍
記をるゝハをこと點ハ無用のゝ似れども猶存して

をてぞるハ告朔の餼羊みもたゝつべし
返點ハもと乙字ありむゝハかりがね點ゝいへり桂菴和
尚家法倭點曰かりがねの點のといへも本字の點畫ゝ
まぎれぬゝゝゝ左ゝゝゝ點ぞゝゝゝ二字三字乃至五
六字までも下ゝり讀ゝこのゝゝゝセバ可用雁金也安齋云
かゝり點レ如此今ハ付ゝを古き寫本ハ如此付て
あり是をかりがね點といへ日蔭蔓これハ形狀ゝつゝゝれ
ゝゝき俗稱と見ゆ或ハ十幹數字天地上下等の字をゝ
つゝゝを大歸（オホガヘリ）といへ博物箋これハ殊ゝ近き俗稱ゝゝ
大須本將門記ハ承德三年の古鈔本ゝゝその書に

切點返點をさしたり□切點返點かくの如くなるしたり已に載る
經傳の點圖ゆも見えたれバこれまでなるべき點法なるべし
經典の文字の傍に訓讀のためゆ假名を付るを捨假
名と云ハ非なりもけ假名といふべし訓の動用を助るなり
たとへバ始の字ハ傍にメと付けムルと付くる類ひなり
土佐の人ハ多り假名といふ訓の後へ付る意なるべし
日蔭蔓　まつをとと點絶てすべがゆ起ともいひまてゞ
付ることハ文明の頃よりあるかされのそろよりあるゆゑ
あるいつるもゝ非なりそのゝしハ朱墨兩點あれバ並び
行れしと分明なり又大須本將門記に假名あれバ

もやく已にこれあることなりけん
文字の四隅に濁點を付ることハ法家の點圖ゆも已に
見えたれども連聲をもゝ多ゆんがたゆり補忘記曰本
濁新濁者本濁者字體本濁字也是時横指謂大乘
等也新濁者依音便新濁宗ゝ習濁字也是竪指謂
蓮華等也ゝゝ宗ゝとあるハ宗旨ゆゝ古昔ハ經傳歴史
及び百家に至りてもゝゆ此濁點を加へ記をとあるゆ
讀法絶ゝ後點法も亦絶ゝり今も佛典ゆゝ殘ゝり
朱引とて地名にハ字の右に單畫一國名にハ字の右に
雙畫一人名ゆゝ字ハ中ゆ單畫一官名ゆハ字ハ左ゆ

単畫丨書名ゆゑ字の中ゑ雙畫丨年號ゑハ字ハ
左ゑ雙畫すこゝと又點法の變なり其歌ゑ　右所。
中ハ人名左官中二ハ書名左二ハ年號　和讀要領

▯　如管朱引左年號右官位中書籍之名

丨　如針朱引左物名右名所中故人之名

按ずるゑ點圖ゑ官名人名處名等ゆゑ單畫書名ゆゑ
雙畫を引くとのあれバ來處なりといふべくこゝにこゝ
ゝと唐土の中抹側抹あゞふなくゝる點法あゞべし

讀法

古丨へ言靈能佐吉播布國萬葉集　とゝもいへるハゆゑと其

尚ゞところ言詞ゑありて文字音韻等の學ハ相尚べる
ところゑあゝゞ東雅かれバ其言語の萬國ゑ勝ゝて足
いぬこゝなく靈妙あるをもてありゝを故ゑ言辭のいひ
やう書籍のよゝゞゑといゞも自ら優美ゆゑ聞人の心
ゆゝといとよく感ずるゞ吾邦の風俗あれバこゝゝ言語の
道をバ重んぜらゝこゝゝありされバ書籍も古昔ハ讀法を
いと嚴ゑハせゝれ丨ありゑゆゑ紀傳明法各その家の讀
法あり其一斑を窺ふゞきゝものハ清家訓點の論語ゑ
古刻本今ゞ希ゑ存す論語考異提要曰國訓本者僥倖施國訓傳云又出清家といふものの
是な流布の道春點といふ經傳の訓點ハ羅山先生の

つけられ〳〵あり羅山先生ハ惺窩先生の門人ゆゑ惺窩先生ハ公家の人なるゆゑ博士家より傳へしところの訓點を受らるゝ門人へも授けたまひしゆゑ道春點より古訓の殘らるゝものゆゑ其外音と訓と一樣なるゆゑ兩點より讀ミくゝと昔大學寮ゆゑ諸生より教授せし時の讀法あるべし これ音訓を一度より覺えさせんが爲なり 舳艫 訓點圖莽あれバ主客混〳〵して意の顛倒を生ぜ或ハ名目よりあるべきところを名目よりもむことなどあり書を解するゆゑ文を作らゆゑ害損いと多きゆゑ

さて經典の古訓より益ある事少〳〵ゆゑ今その一二を いで古歌ゆゑらさびしうゝかるゝなどよめるゆゑハ心さびしあどいふ義なりそれを浦ゆゑ又ハ衣のゝゆゑもいひうけたるものあり毛詩の古點より不屬于毛不離于裏とよめるより意つき萬葉集より心ゆゑとなるゝといふ ゆゑをうゝもとゝあくとよめるより併せく僧契冲講ゞうゝ年山紀聞 竹取物語ハ一人〳〵ハ逢給へ此ハ幾人もある中ゆゑいづれまれ一人と云へゝゆゑ其餘の人より對へゝ云へり云〻今世の心もて思へバ一人〳〵ハ一人毎と云ゞ如く聞ゆれども然より非す又かゝぶゝ禮記曲禮ハ二名

不偏諱（ヒトツクイ）といふる二名とハ二字の名をいふりこハ二字の名の中ゆく上字よまれ下字よまれ離〳〵く下字を諱ずと云ことゆるゆ偏をヒトツくと訓るも古言の例よく當ることなり古事記傳猶この類いと多う推して知るべし

顛倒の讀と文義を害ものゆ説あれどもと國體よ昧きゆ故あり唐土の人ハ四聲を以く義を通じ此四聲吾邦のうへり點とこと大よかハまども其功ハ全く同じ吾國ゆく四聲をいふを猶木よりく魚を求むゆ如〳〵全く其益ゆ〳〵藝苑譜已よ聖人も魯よ居ることを逢

腋の衣を衣宋よ居てゆる章甫の冠を冠〳〵たまゆよ
ゆ〳〵ぶゆ其國よ居てハ豈其俗よ從ハざることを得
べうんや

大〳〵奈良の頃ゆどまでハよろ〳〵の名稱ゆども字音
なゞ〳〵唱ふることハをもく漢籍をよむゆも
よまゞ〳〵かぞりハ訓よよきゆゆ字音よよむことをいふ
しめく字音の物名ゆども常言ゆハゆゆらゆく才を
ザエ芭蕉をバセヲ襖をアヲ筆墨をヒチリキ雙六をスグ
ロク博士をハカセ消息をセウソコ朱雀をスサカゆど吾
邦の言詞よ近く轉じて呼たりき然ることゆ中昔より漸ゆ

字音のいやきことを覺えざるべからずしてハ是を嫌ふべきなり
ら吾邦の詞よりも音便となりたるものの出来る字音の
如くいひかたを多し（古事記傳・三音考）さて古昔讀法ならぬ
ものをいふべ江談抄曰東行西行雲渺々二月三月
日遲々（菅家後集讀樂天北窓三友詩古調此詩及後代菅家人室家
令尋北野令詠之間天神令教テ曰トザマニユキカウ
ザマニユキクモハルバルキサラギヤヨヒウラウラト可
詠云云まゝ東見記曰採菊東籬下悠然見南山（東福
寺開山聖一國師點）こゝゝを見て古昔詩を誦するのやうを
想像すべし

名目鈔序曰夫於我朝稱名目多不當音訓又相交
清濁故不口傳輒不可呼之無口傳而呼之必失法
自古至今家々説々雖區分能學之深思之非無一
義矣といへりかく名自ハ讀法を考へぶれバ容易くよ
難し書名ハとゝも周禮・檀弓・公羊傳・山海經などれ
如く人名ハて孔子・隋煬帝・鄭玄・孔穎達などの如し
これ博士家ハ傳ふるところの讀法あり〻し又忌諱を
避て呼ぶハ牙笏の笏ハ音コツなるを骨と同音なるを
避てゲシヤクといひ曲禮ハコクライとよむべきを黒癩と
同音なれバ病名をいふてキヨクライといふが如き此類ま

少々ハ延喜式ニ神宮の忌詞を載るゝ所ハ其來れるところもあるべしといへども

古しへ音博士あり持統紀職員令等ニ見えたり言語を重んぜらるゝを知るべし音ニ呉音漢音あり呉音ハ吾邦ふるく傳ふるところの音あり其證ハ古事記の假名ゆゑ呉音の〻取る一ツも漢音を取らず書紀ゆゑ呉音漢音をまゝへ用ひたり後ハ漢音の正しきを

もて漢音を習ふべき敕あり日本紀略曰延暦十一年閏十二月辛丑敕明經之徒不可習音發聲誦讀既致訛謬孰習漢音と見ゆかく漢音の行はるゝ

より後古しへより傳へしを呉音とハいふなり呉音ハ呉國の音と地ゆゑ其音韻錯雜多なり

佛典ゆゑ呉音を用ふるゆゑ世ニ儒書ニハ漢音を用ひ

對馬貢銀記ニ日域經論ニハ呉音を用ひとあり古きあらハと見えたり

あるゝど類聚國史曰延暦十二年夏四月己酉朔丙子制自今以後年分度者非習漢音勿令得度とある

ゆゑ佛典も亦呉音ニ讀べき定めあらぬ

明らかなり

呉音あるハ對馬音ゆゑ對馬貢銀記曰此島有十

比丘尼以呉音傳之因茲日域經論皆用此音故謂

之對馬音トまゝ江家次第除目條ニ曰敕許之後大臣召ス參議一人ヲ註ニ云對馬音ニ召之と見えたり世は政事要略の維摩會條はある百濟禪尼法明がことを引きて對馬音の據とすれども今傳へる本は就き閲するに法明尼が維摩經を誦したゝあれど對馬音といふことゝ見えず貢銀記もと一比丘尼とのみありて其名を記さゞれば法明が傳へしとも定め難し或ハ初メ金信禮來テ留ソテ對馬國ニ傳フ於吳音ヲ舉テ國學ノ之因テ名テ曰フ對馬音ト悉曇三密鈔ともいへり

明治廿六年六月一読了　五十九

文教温故卷上終